

徳永直の会会報

第65号

庶民階級の作家徳永直

会長 高木陽助

今年には戦後七十年。一つの節目としてさまざまな行事が組まれることだろう。戦前・戦中を生き抜いてこられた人々が少なくなり、戦争を体験していない人々が多くなっていく。戦争に対する認識もさまざまである。ただ戦争はある日突然勃発するものではない。たとえば堤防にできた「小さなアリの穴」がしだいに大きく成長し、避けがたく思われる大雨によって決壊するようなものであろう。

昭和十年代、徳永直は厳しい言論統制の下、転向を余儀なくされながらも、庶民階級の作家として「黎明期」「彼岸」「八年制」など素晴らしい作品を書きしてきた。

広津和郎（二八九一〜一九六八）は昭和十六年四月に発行された『はたらく一家』に寄せた「徳永氏の小説集に寄す」の中で次のように述べている。

「私は徳永氏を現代の日本文壇で最も小説のうまい作家の一人だと思つてゐた。誇張がなく、ツケ焼刃がなく、一番身についた平易な文章によつて適確に事象を描いて行くその技倆と訓練とは、見上

目次

- ・庶民階級の作家徳永直 高木陽助…………… p 1
- ・「欲しくない指輪」小論 和田崇…………… p 2
- ・「彼岸」について 金野文彦…………… p 5
- ・徳永直文学散歩⑨…………… p 6
- ・その他「会計中間報告」等…………… p 7
- ・「第38回孟宗忌」案内等…………… p 8

げたものである。所謂芸術派と云はれる人人の間にも、この位身についた技巧をもつて、些の危なげなく小説を書いて行ける作家は幾人もあるまい。」

「私は昨夜から今朝にかけて、『はたらく一家』『彼岸』の二篇を新たに読んだのであるが、私がこれ等の作及びその他の氏で作感ずるものは、氏が全くイタについた庶民階級の作家であるといふ事である。庶民階級の生活感情をそのまゝに生活し体得してゐる作家であるといふ事である。庶民階級の苦悶も苛立ちも不如意も忍耐も愚昧も意気地なさも臆病もエゴイズムも真実も、外からの理解ではなく、内側から氏が理解してゐるといふ事である。」

「寧ろこれ等の（庶民）階級の人々と同じ臆病をもつて、これ等の階級の置かれた境遇の苦しさを、誠実な、地味な、実感的な眩きで訴へる作家である。——他の作品もさうであるが、昨夜私が読んだ『はたらく一家』にしても、『彼岸』にしてもさうした作者のつましやかな、臆病な、併し性急な結論で絶望的に興奮したりしないで、一歩でも二歩でも、これ等の作中の人物に幸福の来る事を祈つてゐる優しい訴へがある。」云々。

戦後七十年、我々は人間の社会でどういう事態が起きようと、徳永直と共に、幸福の来ることを祈って一歩でも二歩でも前進しよう。

「欲しくない指輪」小論

和田 崇

「欲しくない指輪」は、雑誌『少年戦旗』の一九三〇年三月号に発表された徳永直の児童文学作品である。『少年戦旗』は、「太陽のない街」や「蟹工船」が掲載された『戦旗』の附録として一九二九年五月に創刊され、同年十月に独立し、プロレタリア児童文学運動の一翼を担う雑誌として発行された。

プロレタリア児童文学運動とは、将来の社会主義革命を担う子供たちの組織、いわゆるピオネールの育成を目指して展開された運動である。そのことは、猪野省三が『少年戦旗』の役割について、「工場・農村に於ける少年少女大衆を、プロレタリア意識に教化し、訓練し、組織してゆ」き、「プロレタリア意識による少年少女の宣伝、煽動」を行うことにある^{注1}と述べていることから明らかである。

しかし、こうした政治主義的命題は、プロレタリア文学運動そのものが陥穽にはまったように、読者の離反を招く危険性があった。たとえば、生活綴方教育で知られる寒川道夫は当時を振り返って、プロレタリア児童文学作品は「いつでも生硬で、政治的意図が露骨すぎて、芸術的感動によって子供達が、自分達の生活の真実を目ざめるような作品にまでは結晶しえない」^{注2}と述べている。『少年戦

旗』の読者としては、組合運動に参加する労働者や農民の子供たち、あるいは、彼らを教える教員たちが想定されたであろうが、後者にあたる寒川の回想は、運動の欠陥を如実に示していると言えよう。

ただし、全ての作品が取るに足らないわけではない。向川幹雄は寒川の指摘するような欠陥があったことを認めながらも、『少年戦旗』に掲載された「子どもを魅了する」作品として、徳永直の「欲しくない指輪」、片岡鉄兵の「源さんとなみ子」、村山壽子の「ころぎの死」を挙げている^{注3}。実際、「欲しくない指輪」は単行本未収録作品にもかかわらず、今日に至るまで四種の児童文学全集^{注4}に収録されてきた。本稿では、戦後も読み継がれた「欲しくない指輪」の分析を通して、同作の再評価を試みたい。

「欲しくない指輪」は、印刷会社で働く十六歳の製本女工のお桂ちゃんが主人公である。貧乏な家庭で育ち父親も亡くしている彼女は、病身の母と三人の兄弟の四人を養わなければならない。そんなある日、会社は「技術奨励法」と称し、最も早く目標値を達成した者に金の指輪を贈ると通達してきた。金の指輪などめったに買えない女工たちは、いつも以上に一生懸命に働いて競争し、その中でお桂ちゃんは一等になる。しかし、社長は金の指輪を渡すと、不景気を理由に女工たちの賃金を下げると言い出す。そして、指輪をエサに賃下げをするという会社の策略に気づいたお桂ちゃんは、もらった指輪を社長の顔へたたきつけるのであった。

この作品で印象的なのは、女工たちの過酷な労働の描写である。お桂ちゃんの仕事は雑誌の口絵を揃える「帳合い」と呼ばれるもので、命を失うような危険性はないものの、寒い工場の中で乾燥した

指先が紙の切れ口に触れると、皮が切れて血がふき出してしまふ。また、彼女の労働対価は、百通り揃えて四銭五厘、調子のよい時で十時間働いて九〇銭しかもらえない。この九〇銭は、現在の価値に換算すると約二七〇〇円となる^ま。彼女たちはケガのリスクを抱えながら、安い労働力として会社の利益を生み出しているのである。

同じように貧しい女工へ焦点を当てた作品といえ、紡績工場で働く女工の過酷な労働実態を報告した細井和喜蔵『女工哀史』（一九二五年）や、十一歳の少女ひろ子が家庭の窮状を助けるためキラメル工場で働き、過酷な労働環境にうちひしがれていく姿を描いた佐多稲子「キラメル工場から」（一九二八年）が想起されるだろう。特に後者を同じフィクション作品として「欲しくない指輪」と比較すれば、労働生産性が低いためにキラメル工場を辞め、ひる子は暗い便所の中で、「小学校だけは卒業するほうがよからう」と書かれた小学校の先生からの手紙を読んで涙を流すというように、主人公の置かれた境遇や心境の変化を複雑に描いた点で、佐多の作品の方が格段に優れている。

しかし、先述のあらずじで明らかのように、「欲しくない指輪」は「キラメル工場から」が描いた若年労働の問題を単純化して児童文学作品に昇華しており、このことは、児童読者の離反を克服するものとして機能している。筆者（和田）はこれまで発表した論文で、徳永直は労働者大衆を読者に想定しており、徹底的に読みやすさにこだわった点を主張してきたが、この創作意識は児童文学にも転用可能である。また知的な発達段階にある児童を文学と思想の両面において啓蒙するためには、「欲しくない指輪」のように平易な文体で起承転結をはつきりさせ、主人公の感情とともに社会構造の矛盾

を解き明かす必要があった。

この作品を分析する上でもう一つ注目しておきたいのが、指輪の象徴する意味である。もつとも、お桂ちゃん自身が指輪は「エサ」であると気づいたように、褒賞としての金の指輪が女工たちの給与を下げる隠蔽工作に使われていることは言うまでもない。百通りを揃えて得られる彼女たちの受取単価は、四銭五厘から四銭へと引き下げられる。これをお桂ちゃんの日給最大値で換算すると、九〇銭（四銭五厘×二〇通り）から八〇銭（四銭×二〇通り）へと一〇銭の減収となり、製本部の女工の人数が作中で「二十人」と記されていることから、単純計算で会社は一日二円の人件費を削減できる。また、一九二七年（作品発表の三年前）の甲丸指輪（18金、4g）の価格が五円一〇銭^庄であることを参照すると、金の指輪に対する会社の支出は、わずか三日で元がとれてしまうのである。

このように、作中の指輪は会社による搾取の象徴として機能している。だが、ここではそれに加え、なぜ褒賞が指輪でなければならぬのかも考えてみたい。

そもそも日本の近代文学では、実に多くの作品で指輪が象徴的に描かれてきた。森崎光子の研究によると、指輪が普及し始めた明治二十四、五年ごろ、清水紫琴「こわれ指環」（一八九一年）や樋口一葉「闇桜」（一八九二年）などで、西洋の知識を下敷きにした男女間の愛の結びつきとして指輪が描かれており、日清戦争後の作品である尾崎紅葉『金色夜叉』（一八九七〜一九〇二年）や徳富蘆花『不如帰』（一八九八〜一九九年）などでは、男性が嵌めて自身の経済力を象徴するものとして指輪が登場する。そして、夏目漱石の『虞

美人草』が描かれた明治四〇年（一九〇七年）ごろになって、女性が嵌めるものとしての指輪のイメージが定着した¹³⁷⁾。

森崎が『虞美人草』を例示したように、漱石は女性と指輪の関係を特に象徴的に描いている。岸元次子が指摘しているように、『それから』（一九〇九年）では、代助が平岡との結婚の御祝として三千代に贈った真珠の指輪が、代助と三千代の心の繋がりをその後の不幸な運命を暗示する役割を果たしている¹³⁸⁾。また、『明暗』（一九一六年）では、津田がお延に買ひ与えた寶石入りの指輪が、津田やお延の虚栄心を浮び上がらせると同時に、二人の夫婦和合の象徴として機能している¹³⁹⁾。

右の岸元の研究成果に、『野分』（一九〇七年）に登場する指輪も加えてよいだろう。文士の中野が、後に自分の妻君となる女が父親に買ってもらった金剛石（ダイヤモンド）の指輪を嵌めていることに気づく。そしてその後、語り手によって「指輪は魔物である。沙翁は指輪を種に幾多の波瀾を描いた。若い男と若い女を目に見えぬ空裏に繋ぐものは恋である。恋をそのまま手にとらすものは指輪である。」¹⁴⁰⁾と、挿入される。おそらく漱石は沙翁（シエイクスピア）を通じて、指輪が男女を「繋ぐもの」であることに意識的であった。

浜本隆志によれば、男女を「繋ぐ」婚約指輪の起源は、妻をお金で買う「売買婚」の習慣にあり、婚約成立時に指輪が代金支払いの証拠として未来の花嫁の父に渡された。そして、紀元前三世紀ごろから、花嫁が未来の夫に対して純潔を守る「契約」として婚約指輪が使われるようになったという。まさに男女間の指輪の授受は、その性差の主従的關係に起源を持つのである。

ここで話を「欲しくない指輪」に戻そう。同作で指輪を贈るのは男性の社長であり、それを受け取るのは女工のお桂ちゃんである。もちろん両者に恋愛関係は無いとしても、明らかな主従関係は成り立つ。つまり、ここで社長と女工とに介在する指輪は、女工の会社への忠誠や従属という「契約」を象徴し、その受け取りを拒否して社長の顔へたたきつけたお桂ちゃんの行為は、会社に対する労働者の、あるいは男権社会に対する女性の隷属的地位からの解放を讀者に触発する装置として機能しているのである。

以上のように、若年労働に関する問題を平易に描写した「欲しくない指輪」は、指輪の持つ象徴的意味を労使関係の中で巧みに介在させることにより、社会の矛盾を認知させ、その解決に向けて児童讀者を触発する物語であった。このことから同作を通して、失敗に終わったプロレタリア児童文学運動そのものや、徳永直の児童文学作家としての再評価の可能性を見出せるだろう。

だが、気づくべきは、この作品が二十一世紀の現代にも児童文学全集に再録され、読み継がれていることである。その普遍性を探ると、戦前と現代とが共有する問題が浮かび上がってくる。

お桂ちゃんたち女工が帳合いた雑誌は、当時の市場に流通し、読者によって消費される。おそらく印刷会社の労働者以外は、その雑誌がどのように作られ、自分の手元に届けられるまでに何重もの搾取が行われているか気づかない。同じように、現代の私たちが使う日用品や着ている衣服も、それがどのように作られているか多くの人は知らない。

たとえば、中国のジーンズ工場を取材したミカ・X・ペレド監督

のドキュメンタリー映画『女工哀歌』(二〇〇五年日本公開)では、格安の賃金で中国農村部出身の少女たちが働く様子が撮られている。ある少女の時給は〇・五元(七円)で、作業中は笑うことも許されない。彼女たちはそうして稼いだ微々たるお金を、村にいる親へと送る。そして、作られたジーンズは、ヨーロッパを中心に世界各国の小売店へと運ばれていくのだ。

一冊の雑誌は一本のジーンズへと変わり、国内の搾取構造はグローバル化により先進国と発展途上国との国際的な搾取構造へと変化した。「欲しくない指輪」に描かれた女工の物語は、現在でもなお再生産され続けているのである。

注

- 1 「戦旗、少年戦旗は如何に編輯、経営されるか」『プロレタリア芸術教程・第四輯』世界社、一九三〇年七月。
- 2 「教室のプロレタリア児童文学意識」『日本児童文学』一九七一年十一月。
- 3 「解説」『復刻版少年戦旗別冊』戦旗復刻版刊行会、一九七七年十月。
- 4 『日本児童文学大系3』(三一書房、一九五五年三月)、『児童文学全集3』(福武文庫、一九八七年三月)、『日本ジュニア文学名作全集6』(汐文社、二〇〇〇年三月)、『一冊で読む日本の名作童話』(小学館、二〇〇四年十一月)。
- 5 『値段史年表』(朝日新聞社、一九八八年六月)によると、当時の公務員の初任給が七五円であり、現在を約二〇万円として、その変動率を元に算出した。
- 6 『値段史年表』(前掲)による。
- 7 森崎光子「近代文学に描かれた指輪」『日本文化研究』二〇〇一年一月。
- 8 「真珠の指輪―それから」の小道具『―』(武庫川国文)二〇〇三年十一月。
- 9 『明暗』に描かれる指輪の意味―お延の指に輝く指輪を中心に―(『かほとり』

二〇〇五年十二月)。ちなみに、漱石の『明暗』が連載された翌年、一九一七年十二月十七日の『大阪毎日新聞』には、好景気の波に乗って給与の増えた神戸製鋼所の女工のあいだで金の指輪を嵌めるのが流行していることが報じられており、指輪は庶民の身近なものになっていた。

10 引用は、『夏目漱石全集3』(ちくま文庫、一九八七年十二月)による。

「彼岸」について

金野文彦

「彼岸」は、佐藤家の人々、とりわけ「ヨシ婆さん」を中心とした家族関係を描いている。また、宮城県登米郡登米町、佐沼町と東京を舞台としている。

「彼岸」を読むたびに、トシヲに連なる佐藤家の「姿」が見える。

それと合わせて「ヨシ婆さん」が生活した登米の街が浮かび上がる。

「ヨシ婆さん」に象徴されるのは、以前の「よき時代」である。

登米が、北上川の船運を軸とした物流の結節点として栄え、洋風の小学校を建てるだけの財力資力を持っていた時代である。だが、鉄道開通などを機に、一地方の町になっていく。失った「亭主」や足の不自由な「貞助」などは、旧城下町の衰退と重なり合っている。

むろん、歴史的な検証をすれば、単線的な衰退とはいえない。大正期には、東北本線と連結する仙北鉄道を開通させたり、乗り合いバス網が巡らせられるなど、養蚕や米作から商業・金融の小拠点として登米と佐沼は、宮城県の北上川流域の小都市としての役割を持っていた。

「ヨシ婆さん」を親戚が押し付けあい右往左往する、貧しさから抜け出ることのできない人々へのしかかる強固な「封建制」が重くのしかかっていたこともあるのか。それでも、「婆さん」が東京と登米を往復するのは、仙台から小牛田を経て瀬峰に至る大動脈の東北本線である。さらにそれから枝のように伸びる仙北鉄道である。

「ヨシ婆さん」の行き来は、資本主義の発達を象徴する鉄道である。「彼岸」の時期は、昭和恐慌後で日中戦争前夜である。重くのしかかる戦争前夜の重石に、徳永直は故郷回帰を指向したのではないであろうか。関連する「結婚期」や「おもしろい町」などは、そういう系列に入ろうか。回帰の中で、妻・トシヲの故郷や家族親戚を凝視することで、剛直な理論からいったん離れることで、人間の生々しい姿を描くことができたのである。

官憲にしたたかに抵抗するトシヲや「ニューピン」（「背の高い娘」といった新しい人間像・女性像を描くには、徳永直は、満州経験などの苦難の道と一九四五年八月の大きな転換を待たねばならなかったのである。

（宮城県・佐藤三千夫記念会事務局長）

徳永直文学散歩⑨

緒方 宏 章

『最初の記憶』

……私はよく母と一緒に、箒はらをかついで、熊本市の「朝市場」ま

で竹箸たけしほを売りにいった。二つの箒はらを天秤棒てんびんぼうでつつかけて、調子よく軋こみ音をさせながら担いでゆく母の背後から、私も小さい草鞋わらじを履いて小走りについてゆく。部落からそこまで一里半。母はいつも途中で三度くらい息をいれた。

「竹箸たけしほは要らんかいな」

朝市場の片隅に荷をおろすと、母は天秤棒てんびんぼうで身体からだをささえながら、通る人毎にそう声をかけた。八百屋とか、荒物屋とか、魚河岸も、青物も一切合切いっぺんごとが集まっているこの朝市場では、買出人かいたしにんもいろいろあった。

私達と並んで、荷をおろしている連中もたくさんあった。唐瓜からなすや胡瓜かぼちや車を積んだ俣横まよこたえている百姓ひやくしやうもあれば、帆立貝細工ほなていばいこの杓子しやくしを箒はらいっぱいならべている婆さんもある。組板ぐまいた売り、山のように束ねた女郎花むすめがはなや桔梗ききやうやの花売り、自然薯じねんしよ売り、でっかい白しろや杵きねやを道端みちばたにころがして、呑気のんきに煙草たばこをふかしている遠在とんざいの百姓ひやくしやうもあつた。

背後おのに大きな枝垂柳しだれやなぎがあつて、ときには馬うまや牛うしが繫つながれていることもある。私はその柳やなぎの大きな股またにのつかつて、市場いちばじゅうの騒さわがしい景色けしきをながめていた。みんな眼まなこの色いろが変わっている。売るにも買うにも喧嘩けんかであつた。

「竹箸たけしほ要らんかいな」

「自然薯じねんしよ、持つてかんか」

母もみんなに負けずに叫んでいた。売方うりかたにもいろいろあつた。母や杓子しやくし売りの婆さんのようにキイキイ叫びたつるものもあれば、組板ぐまいた売りのおやじみたいに黙然もくねんしているものもある。啞ぐわいえ煙管えんくわんに捻鉢ねんぱつ巻まきで、手をうしろに組んだ俣まよ、買出人かいたしにんが値ねを訊きいてもロクろくに返

（「徳永直文学選集」より）
 当時の朝市場の様子が、まるでその場にいるかのように生き生きと伝わってくる。今でも、静かに坪井川が流れている



明八橋より上流を望む。左手に朝市場があった。

辞しない。オイ、一体売るのが売らんのか、と怒鳴られると、眼は相変わらずどつかへ据えた俣、何か口の中で呟く。買出人が気にいらないでチエツと舌打ちして去っていつても、やはり一つところを眺めている。……

しかし買出人たちは殆ど一致していた。彼らはみんな「何と詰まらない品物ばかりだ」という顔色をしていた。ズイと傍へきて品物をひつつかんだりひつくりかえしたりして、まず売手の度肝をぬくのであった。

「いくらだ？」十把が十二銭、ペツ」

ひつつかんだ箸束を汚いものでもツカんだように笹のなかへ投げ戻して、さつさと立ち去った。箸束はく

ずれたり汚れたりする。母はそれを一つ一つ繕ってまた叫ぶ。

「竹箸は要らんかいな」

……

（「徳永直文学選集」より）

2014年度会計報告(4月～12月)

2014年度会計報告(4月～12月)			
収入		支出	
繰越金	60,913	事務費	1,830
会費(45人)	90,000	通信費	12,792
利子	23	総会関連費	1,600
寄付	1,000	熊本文化振興会関連	20,000
		HP関連費	2,580
収入合計	151,936	支出合計	38,802
		残金	113,134

- * 2014年度の会計報告は、総会時に行います。
- * 2014年度会費(2,000円)の納入をお願いします。
 「孟宗忌」の当日、もしくは「総会」当日に、会費を集めさせていただきます。
 または、「総会」後に振替用紙を送付しますので、お振り込みください。
- * 住所変更等がありましたら、下記までご連絡ください。

〒862-0955 熊本市中央区神水本町6-40 緒方 宏章

第三十八回「孟宗忌」のご案内

二〇一五年二月十五日(日) 午後一時半より

第一部「碑前祭」・午後一時半より

場所：徳永直文学碑前(泰勝寺入り口)

① 開会

② 黙祷

③ 献酒

④ 献花

⑤ メッセージ披露

⑥ 経過報告

⑦ 諸連絡

第二部「徳永直作品朗読会」・午後三時より

場所：ガーデン・パーティー(上通り草場町)

① 徳永直作品朗読会(約80分)

『彼岸』(一九三六年昭和十一年)

朗読：熊本朗読研究会

解説：元熊本大学教授(前会長)

中村 青史 氏

② 懇親会：午後五時 ～ 午後七時(予定)

(会費：三〇〇〇円)

「徳永直」ホームページのご案内

徳永直のホームページを開設しています。「徳永直の会」の内容が掲載されていますので、是非ご覧ください。また、ご意見・感想等も受け付けています。

お知らせ

●「パレボ03」がおくる熊本学講座【募集中】

1 講座の内容

〔第1回〕 2月3日(火) 14:00～15:30

「民話の中に魂の故郷を見いだした男」劇作家 木下 順二

講師：熊本近代文学研究会 永田 満徳 さん

2 会場 くまもと県民交流館パレア 10階 会議室7

(熊本市中央区手取本町8-9)

3 定員 約30人 ※先着順です

4 申込方法 ①希望講座 ②氏名(ふりがな) ③住所

④電話番号 ⑤年齢 ⑥性別

⑦託児の有無を下記までお申し込みください。

★お申込み、お問い合わせ★

熊本県生涯学習推進センター

(土・日・祝日は電話等のお問い合わせができません)

・電話 096-3555-4312

・FAX 096-3555-4317

・メール manabi@pref.kumamoto.lg.jp

会員募集

新規会員を募集しています。お知り合いの方に、入会のお誘いをお願いします。また会員募集のためのアイデアがありましたら、お寄せください。